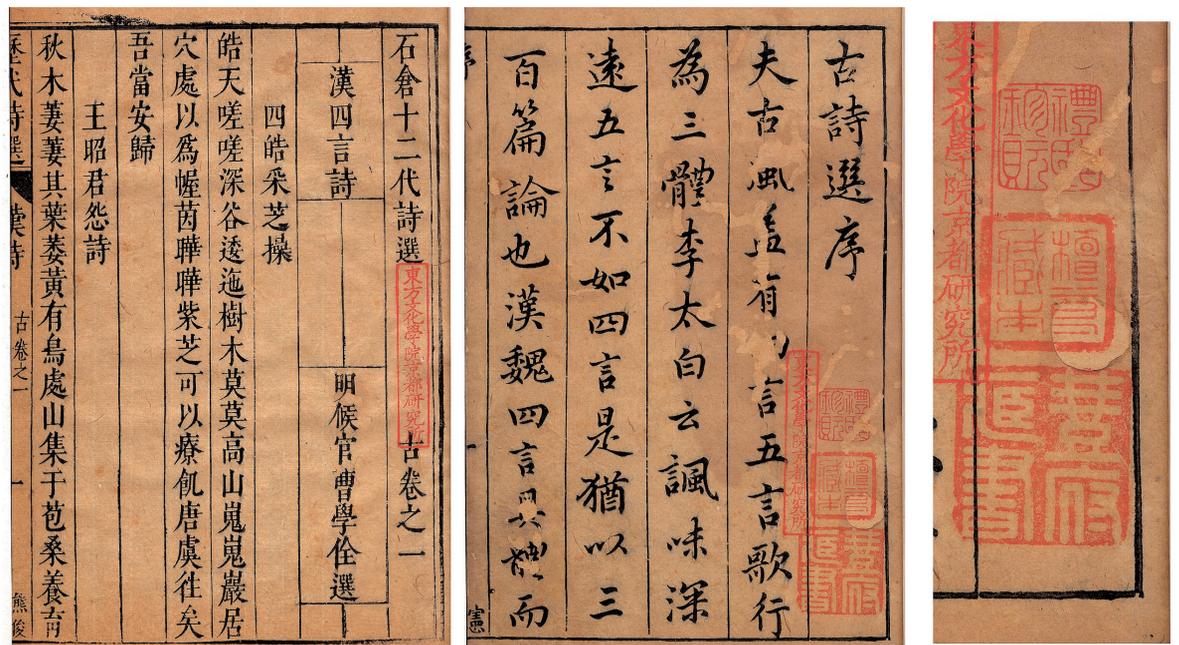


# 漢字と情報

No. 11  
2005・10



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)  
附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 朝鮮の写本と俗字
- 幻の『全室藁』
- 本邦残存典籍による輯佚資料データベース
- 人文研のアーカイブス(11)『歴代詩選』

## 朝鮮の写本と俗字

矢木 毅

東京の静嘉堂文庫に所蔵されている『大東稗林』という大部の写本は、朝鮮時代の末期に編纂された在野の記録、いわゆる「野史」の叢書で、旧来、その編者は確たる根拠もなく李宜哲と言われてきたが、実際には沈魯崇が十九世紀の末頃に編纂した叢書であることが彼の文集、『孝田散稿』の記述によって明らかになった。この叢書は一部散逸したところもあるが、今日ではソウルの国学資料院から影印出版されているので、比較的容易にその全貌を伺うことができる。

これと紛らわしいのが『稗林』という野史叢書で、こちらの方は編者不明、しかし『大東稗林』に基づいてさらに史料を補充・選別した、いわば朝鮮時代の野史叢書の集大成として知られており、こちらもソウルの探求堂から影印出版されて学界に供されている。

両者はいずれも私の書架に並んでいるが、さてその内容に分け入ろうとすると、はたと困惑する箇所が少なくない。朝鮮の書物といっても、もちろん正則の漢文で綴られているし、写本といっても、一応均整な楷書で書かれているのであるが、ところどころに俗字が用いられているので、私のように古文書学の正式のトレーニングを受けていない素人学者は、どうしてもそこで引っ掛かってしまうのである。

朝鮮の俗字（筆写の便宜上、正字を簡略化したもの）については、中国・日本のそれと共通するものも見られるが、同時に朝鮮独特の俗字も少なくない。鮎貝房之進はこれについて幾つかの例を示しているが、「前後の文章より大抵は推知さるゝもの」といって、ごく軽くあしらっている。なるほど、鮎貝ほどの学識があれば特に論じるほどのこともないのであるが、これでは取り付く島がないというものである。ところが親切な人は

どこにでもいるもので、台湾の学者の金榮華という人が『韓国俗字譜』という本を出してくれているので、これで大体のところは理解できる。

李丙燾はこの本に序文を寄せて、「たとえ漢文に多少、専門知識がある人であるといっても、読み解くことがそれほど容易ではないのは当然のことだ」といっているが、李丙燾の世代にとっては、本当は簡単に読み解くことができたのであろう。しかし、もはやそれだけの学識を持たない後の世代の人間にとっては、やはり多少のトレーニングを積まなければ、俗字まじりの写本を読みこなすことは容易ではないのである。

朝鮮後期に各種の野史叢書が盛んに編纂された背景には、当時の社会の根底にどす黒く渦巻いていた党争の由来——その是非を明らかにしたいという意識が強く働いていたものと考えられるが、政局の機微に触れる党争関係の記述は、それだけに公然と刊行することは憚られていた。人々は争ってそれらの写本を回覧し、またそれを筆写して、さまざまな写本のバリエーションを生み出していたわけであるが、丁寧に書き写そうとしても、そこにポロリと紛れ込んでしまう俗字の存在には、すこし慣れてくると、当時の人々の息遣いが伝わるようで、かえって愛着が湧いてくるものだ。

手近な例を挙げると、京都大学附属図書館河合文庫所蔵の「党論源流」——これは安鍊石の「党論源流」やら、金宗直の『佔畢齋集』やら、『高麗史』の辛旽伝やらを抜書きした雑抄本で、とにかくごちゃごちゃとして、よくわけのわからない代物である。最初はよほど丁寧に書くつもりであったらしいが、中ごろから段々とぞんざいになって、最後は草書交じりの走り書きに終わっている。

最後の方に辛旽伝が抜書きされているのは、党争の歴史から遡って、最後は王朝史における最大のタブー、朝鮮太祖（李成桂）による高麗王位の篡奪の問題にまで意識が及んでいたことを示すのであろう。そのことに私は一つの興味を覚えたのであるが、それはともあれ、『大東稗林』や『稗林』の編纂の背景には、こうした様々な意図を秘

乎○先生二十八岁関手撰一録名  
譜圖次之以紀年又次之以師友平生  
之諱家庙祭儀之可法者悉緘身載無  
氏白母夫人効之以赴舉是年秋中別  
九春高台尉榜下登第十一月辞朝還  
三十七歳拜弘文館修撰○先生四十  
經進特選文学之士應選者凡十九人  
經幄時母夫人年七十一辞故取養

河合文庫蔵「党論源流」（佔畢齋年譜の抄録部分）  
写本における「改」の一例。「辞職帰養」を「辞帰職  
養」と書き損じて、脇に転倒符合を書き入れている。

めた多様な雑抄本の筆写と流通があり、そうして  
そこには朝鮮の俗字が、それぞれそふんだんに用い  
られていたというわけであった。

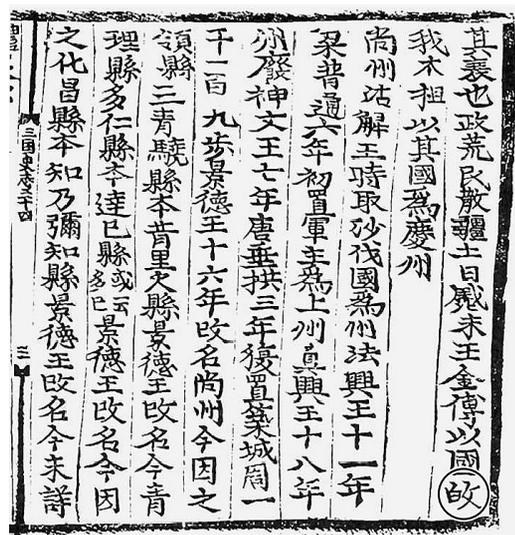
ここで少し実例を呈示しておく、例えば、  
「離」は「雉」と書き、「撃」は「仵」と書き、  
「獨」は「独」と書く。要するに、複雑な偏旁を  
すべて「文」「イ」「市」などで代用しているわけ  
である。

今日、韓国・朝鮮の人々は、そもそも書写生活  
において漢字をあまり用いなくなっているから、  
祖先が用いてきた俗字についての知識も、特に若  
い世代の人々には全く伝わっていないのではない  
かと思う。しかし、「儒」を「文の人」と書いて  
「仗」とし、「墓」を「土に入る」と書いて「全」  
とすることなどは、言葉遊びとして見ても、なか  
なかによく出来ていて興味深い。

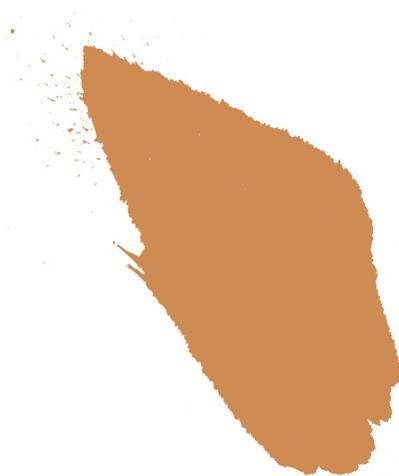
ちなみに、この種の俗字は写本に見られるだけ  
ではなく、広く刊本にも用いられている。例えば  
『三国史記』の正徳刊本というのは、朝鮮史にお  
ける第一級の基礎史料として広く知られているも  
のであるが、実際のところは俗字だらけ、誤字・  
誤刻だらけの田舎版で、歴史研究の立場からいえ

ば、迷惑なこと甚だしい。しかし高麗刊本の面影  
を残すこの朝鮮中期の刊本のなかでも、たとえば  
新羅最後の王である敬順王・金傅が高麗の太祖・  
王建に帰順するという重要な場面の記述において、  
「末王金傅，以国帰我太祖」の「帰」字は、やは  
り俗字の「改」という字で記されているのである。

『大漢和辞典』五巻，四九〇頁には「改」を  
「迫」の通字としてあげているが、朝鮮ではこれ  
は「帰」の俗字である。この俗字は日本などでも  
よく用いられていた「皈」という俗字の別体であ  
ろうが、こんな些細な発見のなかにも、こちたき  
研究などとは別個の次元において、やはり朝鮮の  
書物に無限の興味と愛着とが生じるのを禁じるこ  
とができない。（人文科学研究所助教授）



『三国志記』（学習院大学東洋文化研究所影印本）  
刊本における「改」の一例。



## 幻の『全室藁』

宮 紀子

昨年夏以来、ほぼ月一回、京都五山の一、建仁寺の両足院にて、典籍類の調査に参加させていただいている。そこでは、京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室の木田章義教授とそのお弟子さんたちが中心となって、室町から江戸時代にかけての抄物の調査、研究が精力的に進められているが、宋元版や五山版も相当量あるとのことで、私にも声をかけてくださったのである。

大元大モンゴル国から明朝初期にかけて、日本でいえば鎌倉末期から南北朝、室町時代にかけての文化、思想、僧侶たちの海を越えた交流、五山僧の中国文化の受容の実態を生々しく語る貴重な一次資料が、代々の住持によって現在にいたるまで整理、大切に保管されてきた。宋・元刊本、明の洪武、永楽期の刊本は、その骨董的な価値はもとより、ここ両足院にある、ということ自体に大きな意味がある。また、それらを忠実に覆刻、写した五山版や抄本の中にも、中国本土ではもはや失われてしまったテキストがいくつもある。かつて朝廷、幕府のブレインとして政治、外交の一翼を担った五山僧たちの学問の軌跡をうかがえるそれら現物のひとつひとつを、いま再びちよくせつ手にとって、紙の感触を確かめながら読み、ノートをとることができる時間は、なににもかえがたい。ときには、同じテキストを宋元版と五山版で見比べることさえできる。一学生としていえば、京都ならでの、まことにぜいたくな実習である。

その興奮の幾許かを伝えるべく、ここでは、第55函に収められる天下の孤本、季潭宗泐の『全室藁』について、簡単ながら紹介してみたい。

季潭宗泐（1318-1391）は、大元ウルスの後半期、江南の禅宗を統括シカアンの覚えもめでたかった笑隠大訥の弟子で、虞集や黄潛といった文名高き官僚たちとの交流でも知られる。明の洪武帝

も当初かれを重用し、南京の天界寺（前身は文宗トク・テムルの勅命によって建てられたモンゴル時代の大龍翔集慶寺）にて、仏典の訳注の編纂や外交を担当させた。洪武十一年（1378）、仏典の収集を名目として西域に派遣されたが、洪武十五年に帰朝、仏教統括機関である僧録司の右善世および天界寺の住持をつとめた。禅僧としてはほぼ頂点までのほりつめたといっている。しかし、じっさいには、洪武十三年の胡惟庸の“乱”に加担した疑いをかけられ、何度も吹き荒れた粛清の嵐の中で、凄惨な晩年を過ごしたようである。とにかく、中国の政治、文化史のみならず、日中交流においてもキー・パーソンとなる大物である。詩文にすぐれ、洪武三十年の『皇明詩選』や、永楽二二年刊行の『鼓吹統編』にもいくつかその作品が選ばれており、五山僧の模範ともなった。なお、かれの生涯の概略を知ろうとするならば、両足院の所蔵にかかる第52函の抄本『全室和尚語録』の末尾に附された岱宗心泰の手になる永楽年間の塔銘が今のところ一番拠るべき資料である。

季潭宗泐の詩文集としては、塔銘にも言及されるごとく、『全室外集』が有名であり、やはり両足院蔵書の第168函に五山版が収められている。全九巻、細黒口四周双辺、12行×21字。版心および巻頭に掲げられた徐一夔の序——『始豊稿』巻十二にも収録——は、この書を『全室集』と呼ぶ。

中国では、永楽刊本が伝来しており、やはり黒口四周双辺、12行×21字の版式だが、九巻の後にさらに続集一卷を附す。現時点では現物を目撃していないので、『善本書室蔵書志』および『五十万巻蔵書目録初編』の記述に拠らざるをえないが、徐一夔の序のほか、朱右、王達善の序が附されるとのことである。朱右の序は、かれの文集『白雲稿』巻五では「全室集序」として収録されているが、永楽刊本の序文の中では「全室藁」と呼ばれている。いっぽうの王達善は、永楽年間に国子助教、翰林侍読学士等を歴任した文官で、「二十四孝讚」、「梅花詩」などの作者として知られるが、文集は残っていない。この序文は永楽元

年（1403）の作である。なお、『四庫全書』収録本も永楽本と同じ九巻続集一巻の構成だが、序文は五山版と同じく徐一夔のものしか載せない。

ただ、どのテキストにおいても、巻一：御製に和す、もしくは制に應える作、巻二：楽府、讚仏楽章、巻三：五言古詩、巻四：七言古詩、巻五：五言律詩、巻六：七言律詩、巻七：七言絶句、巻八：六言、五言絶句、巻九：疏、題跋、という構成、収録作品に違いはなかった。

ひるがえって、両足院の『全室藁』はといえば、不分巻一冊、外寸は縦23.4cm 横17.4cm、薄茶色の表紙で三箇所仮綴がしてあり、半葉12行×20字、正確にいつの書写とはわからないが、日本の僧侶の手になるとみられる抄本である。巻頭には、朱右の「全室藁序」のみが掲げられる。そして、古楽府、楽府、七言古詩、五言古詩、五言律詩、七言絶句、六言、七言絶句、七言律詩、「西天紀行」、五言絶句、序、題、記、疏の順に配列される。

収録される詩文は、相当数が『全室外集』と重複し、ジャンル別にみた場合、配列も似ているが、仔細に見ていけば、単純に『外集』の別本と片付けられないことに気づく。

まず、古楽府七首、序、題、記は、『全室藁』にしか収録されない。逆に、『外集』の巻一、および各巻の巻頭に掲げられる洪武帝の聖旨や魯王の令旨を奉じて作成された詩文は、『全室藁』にはまったく収録されていない。唯一の例外に見える「猷仏楽章八曲 応制」は、『外集』巻二では「善世曲・迎仏」から始まる楽章に相当するが、そこでは却って応制の作であることが隠されている。おそらく大元時代の作であったためだろう。

重複部分については、たとえば「三台詞四首」、  
「銅雀台二首」、  
「王昭君」、  
「楊柳枝詞五首」は、『外集』巻二では、  
節略されて「三台詞二首」、  
「銅雀台一首」、  
「楊柳枝詞三首」しか収録しないように、『全室藁』のほうがより原型に近いと考えざるをえない。ほんらい収録されていたのに、『外集』の段階で削除されてしまった「王昭君」のような例は多い。逆に『外集』各巻の後ろのほうは『全室藁』に見えない作品が纏まって載る。

つまり、『全室外集』は、『全室藁』をもとに、各ジャンルの作品を選定——ときの政権に不都合な、たとえば胡惟庸、藍玉に絡むものは当然取り除いた上で、九巻仕立てに変更し、各巻の最初と最後に新たに採集した作品を附したものと考えられる（まず、五山版がもつづいたテキストが洪武後半に徐一夔の序を附して刊行され、永楽元年の刊行の際には、続集の編輯とこれらの経緯をふまえ、朱右の「全室藁序」も併せ掲載したのだろう）。

その推測をうらづけるのは、『全室藁』の「西天紀行」である。これは、『千頃堂書目』巻二八において佚書とされた『西游集』一巻に相違なく、その資料的価値は極めて高いが、『外集』ではその作品の一部のみを採り、各巻に単独の作品として振り分けてしまっているのである。

以上からすれば、こんご、『全室藁』が多方面において基本資料となるのは疑いない。

明代の研究は、『実録』、档案があるにもかかわらず、地方志や筆記の微細な記事から地域社会の経済や文化の分析、素描に終始する傾向があり、こんにちにいたるまで根幹たる政治史の概説書が存在しない。人文科学研究所では、恐らくはそうした状況に対処するため、かつて『実録』とつきあわせて検討すべき明代の文集の収集に力を注いだ。その結果、国内外の貴重なテキストをおもに影照本でまとめて見ることができる。じつは、焼付けの済んでいないマイクロフィルムも相当量ある。季潭宗泐と同時代の文人が“倭寇”について語る未紹介の資料もある。建仁寺の典籍と研究所のさまざまな形の資料が連動し、とうじの朝廷の動きが見えてくることは、決して少なくない。

先人の努力の結晶を保存、公開していくことはむろん大事であり、こんごも資料収集の努力は続けるべきだろう。だが、同時に、それらを死蔵せず、ただ安直に情報を流すのではなく、ある程度長期的な視野、研究計画のもとに真摯にじゅうぶん活用し、着実な成果を遺していくこともまた、所員、助手に課せられた使命なのではなかろうか。

（人文科学研究所助手）

## 本邦残存典籍による 輯佚資料データベース

武田時昌

いま「陰陽五行のサイエンス」という共同研究班で『五行大義』『医心方』を会読している。それらは、古代、中世の陰陽五行説、医薬学に関する論説を網羅しており、その引用書には中国で散佚してしまった著作（『五行大義』自体もそうであるが）が数多く含まれる。

日本に残存する典籍（邦人の編著を含む）には両書のように中国書の佚文が多数存在するが、それらを集録した先駆的な輯佚書には、『本邦残存典籍による輯佚資料集成』正統二冊がある。これは、昭和7年に、小島祐馬博士の指導の下に新美寛氏が開始したプロジェクトである。不幸にして新美氏は戦死したが、その遺業を鈴木隆一氏が継ぎ、昭和43年になってようやく出版に漕ぎ着けた。

東洋文化研究所の平勢隆郎氏らとの共同研究「江戸・明・古代プロジェクト」（本誌第9号の記事参照）の企画の一つとして、本書のデータベース化を試みることにしたのは、それが研究所の草創期における誇るべき研究成果物であると考えたからである。しかし、その動機の発端はずっと以前に遡る。緯書は、大学院の授業レポートで取り上げてから、通読？したことがある数少ない典籍の一つである。緯書の輯佚作業と言えば安居香山・中村璋八両氏の「緯書集成」が有名であるが、新美氏は本書の緯書類においてすでに類書等との校勘を試みている。そのことはあまり知られていないことのように思うが、異端、虚妄の書として市民権のなかった緯書にいち早く注目した新美氏の慧眼に敬服し、緯学研究の先覚者としてずっと思慕してきた。

さて、目論見としては、本書の増補改訂版を作成したいのであるが、とりあえず森泉和人氏の協力を得て、OCRで読み取り、小学類を除く経部、

史部、子部（集部はもともとない）の電子テキストを作成した。現時点ではまだ整理中であるため、評点も施していないテキストファイルを、小生のホームページ (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takeda/>) でこっそり公開するに止めてある。

それでも、目ざといネットサーファーがいて、史部の『瀬郷記』の読みは「らいきょうき」とすべきとのご指摘をいただいた。また、原著にもカードの取り間違いが多少ある。気づいた一例を示せば、『天地瑞祥志』20が引く易注を、『周易馬氏伝』とするのは、『漢書』礼楽志の顔師古注の誤りであるがごときである。

『五行大義』『医心方』について言えば、両書の引用書を網羅的に集録しているわけではない。とりわけ、中世の術数書があまり採録されていない。もっとも幸いなことに、すでに中村璋八氏の『五行大義校注』（汲古書院）やオリエント出版社が刊行した影印本の解説（『医心方の研究』）にはそれぞれの引用書索引が附録されている。『医心方』については、それとは別個に櫻井謙介氏作成の草稿版もある。それらを利用すれば、電子テキストのデータを寄せ集めるのは、さほど困難な作業ではない。研究会終了時をメドに、両書のテキスト校定をしっかりと行い、輯佚資料データベースを完成させたいと考えている。

なお、『黄帝内経太素』の佚文についても、オリエント出版社刊『東洋医学善本叢書』の解説に一覧表が掲げている。『太素』の電子テキストは、小林健二氏作成のCD版があるほかに、昨春に急逝した元センター教授、勝村哲也氏が苦心して作った電子データ（楊上善注を含む）が眠ったままに手元にある。山田慶児先生の共同研究班で『太素』を会読していた時の遺産であり、その校合作業が訳稿の整理とともに「宿題」となっている。

そのように輯佚事業は多くの先人達が残した成果を綿々と受け継いでいくことによって成就するものである。その大連鎖の輪環に加わることができるのは、文献学を志した者にしか味わえないささやかな喜びなのである。（センター教授）

人文研のアーカイブス (11)  
 歴代詩選 即 石倉十二代詩選  
 明曹學佺輯

崇禎四年序刊

梶浦 晋



本書は、明の曹學佺（字能始，号石倉）の編になる、古より明代までの詩をあつめた總集である。宮内庁書陵部や国立公文書館等にも明刊本が蔵され、『四庫全書』にも『石倉歴代詩選』という題で収められているが、本所蔵本は1257巻と通行の本（506巻或いは888巻）より巻数が多い。

「禮府藏書」「檀尊藏本」「禮邸珍玩」の蔵印があり、『嘯亭雜録』の撰者である清の礼親王昭槿（号檀樽）旧蔵であったことをしめしている。『嘯亭雜録』石倉十二代詩選の条には、

今余家所蔵則一千七百四十三卷較四庫所收多至千餘卷矣……

とあり、現在本所が所蔵するものと486巻の差がある。

ところで、本所の蔵書は、創立当初到北京留学中であった倉石武四郎等の仲介で購入した、武進の陶湘の旧蔵本を基礎として整備したことは、よく知られるところである。陶氏の蔵書の特色は、明閔氏套印本、汲古閣本、武英殿本や彙刻（叢書・叢刻）の収蔵が豊富であったことといわれている。本所が購入したのは、そのうちの彙刻部分である。倫明『辛亥以來藏書紀事詩』陶湘の条に、

近年漸散出其叢書類全部售於日本誤以足本五百册石倉詩選雜其中極可惜

とあるのは、ここにあげた『歴代詩選』のこととおもわれる。

また鄭振鐸も『劫中得書記』石倉十二代詩選の条に、以下のように記し、この書が日本へ渡ったことを惜しんでいる。

後蘭泉所藏叢書悉售之日本東方文化學院京都研究所此書亦東去不返（此本有禮王府藏印必即爲彙刻書目所云之本惟彙刻所舉尚有七至十集此本无恐彙刻誤記以九集本即社集也見後）

陶氏は蔵印をおすことを好まなかったようで、本所所蔵の陶氏旧蔵本に蔵印があることは稀で、この本にもない。右にあげた印影は嘉慶二十年南昌府學據儀徵阮氏文選樓藏宋本重刊『十三經注疏』のものである。（センター助手）

## HP・TOPICS

21世紀 COE プロジェクトの拠点リーダーとして活躍中の高田時雄教授のHPでは、主宰する共同研究班の情報とともに1995年以降の発表論文30数篇（PDF 文書）を公開しています。また、「参考資料」には、「人文科学研究所所蔵漢文聖經簡目」等の目録に加えて、「ユニコード漢字部首索引」があり、「プリントアウトして手元に置いておくと意外に便利です」とコメントされていますが、まさにその通り！よろしくご活用ください。

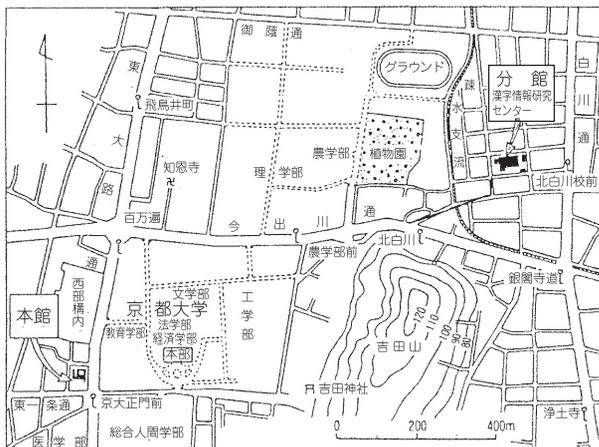
### ユニコード漢字 部首索引

暫定版

【1画】				土	571F	3626	2123C
一	4E00	3400	20001	士	58EB	3683	2151B
丨	4E28		20061	夕	5902	3685	21553
丶	4E36	3405	2007C	攴	590A		
ノ	4E3F	3406	20086	夕	5915	3688	21584
乙	4E59	3407	200C9	大	5927	368E	215D2
丿	4E85	3427	2010C	女	5973	36A2	216A6
【2画】				子	5B50	373D	2193C
二	4E8C		2011E	乚	5B80	3749	219B9
亅	4EA0	342A	20141	寸	5BF8	3773	21B1D
人	4EBA	3430	201A2	小	5C0F	3778	21B54
儿	513F	34AB	20476	尢	5C22	377C	21BC1
入	5165	34B0	204DB	尸	5C38	378B	21C23
八	516B	34B5	20500	尹	5C6E	37A2	21CFE
冂	5182	34BA	2053C	山	5C71	37A4	21D2D
冫	5196	34C0	20573	凵	5DDB	3829	21FE6
彳	51AB	34C5	205AC	工	5DE5	382A	22011
儿	51E0	34D8	20627	己	5DF1	382F	22033
凵	51F5	34D9	20674	巾	5DFE	3832	22052
刀	5200	34DA	206A3	干	5E72		22189

## 【DICCS NEWS】

- ・これまでセンター長は、人文研の所長が兼任してきたが、今秋に人文科学研究所規定第7条を改正し、原則として東方学研究所主任をもって充てることにした。ついで、10月1日付けで、森時彦教授がセンター長に着任した。任期は、2007年3月31日まで。
- ・2005年度の漢籍担当職員講習会は、10月3日(月)～10月7日(金)に初級を実施し、23名の修了者があった。中級は11月7日(月)～11月11日(金)で、22名の参加を予定している。講師陣は、いずれも昨年度と同じである。中級の初日には、文部科学省から柴崎孝氏(研究振興局情報課学術基盤整備室長)が来られて、開講挨拶される予定である。なお、昨年度末に講習会用パソコンを一括して買い換えた。機種は、EPSON ENDEAVOR NT2700 15型 TFT, XGA 液晶。
- ・「第2回 TOKYO 漢籍 SEMINAR」を来年3月11日(土)10:30～16:00に開催する予定である。今回のテーマは「三国鼎立から統一へ—史書と碑文をあわせ読む」。会場は、学会会館2階210大会議室(千代田区神田錦町3-28)に変更した。講演テーマと講師は以下の通りである。
  - 「魏・蜀・呉の正統論」 宮宅潔助教授
  - 「漢から魏へ—上尊号碑」 井波陵一教授
  - 「魏から晋へ—王基碑」 藤井律之助手
- ・最新のセンター刊行物
  - 「漢籍目録—カードのとりかた 京都大学人文科学研究所漢籍目録カード作成要領」(2005年1月)
  - 「東洋学文献類目」2002年度(2005年3月)
  - 「橋本氏収蔵 中國書畫録」(東方学資料叢刊第13冊, 味岡義人・曾布川寛編, 2005年3月)



発行日 2005年10月30日

発行所 京都大学人文科学研究所附属  
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>